

2026 年 7 月 12 日（聖霊降臨後第 7 主日、A 年特定 10）

メッセージ

「み言葉の種」

（マタイによる福音書 13: 1-9, 18-23）

司祭ヨセフ太田信三

教会の庭を眺めていると、冬には枯れたように見えた木々が、春になると青々と葉を茂らせていることに気づきます。お世話をしてくださる方々のおかげでもあります、それだけではありません。目には見えなくても、根には絶えず養分が送られ、命が育まれているのです。何もないように見えた土から芽が顔を出す姿を見るたびに、神がお造りになった命の不思議を思わされます。同じように、私たちの目には見えなくとも、神の恵みは絶えず一人ひとりに注がれています。

今日の福音では、主イエスは「種を蒔く人」のたとえを語られます。パレスチナでは、種を蒔いた後で土地を耕す農法が一般的でした。そのため、種は道端や石地、茨の中にも落ちます。決して効率のよい蒔き方ではありません。それでも農夫は豊かな実りを信じて、惜しみなく種を蒔き続けます。

神もまた、私たちがどのような状態にあっても、御言葉という種を蒔き続けてくださいます。そして私たちの心を耕し、石を取り除き、茨を刈り取りながら、その種が実を結ぶことを忍耐強く待ってくださるのです。

蒔かれた種には力があります。み言葉そのものに、実を結ぶ神の力が込められているからです。だからこそ私たちにできることは、その力を信じ、み言葉に込められた神の思い、神の愛から離れることのないように、日々「わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください」（主の祈り）と願い、祈り続けることです。神の助けがあるからこそ、私たちは石ころや茨のようなさまざまな誘惑の中にあっても、芽を伸ばすことができます。神が私たちの手をしっかり握ってくださっているからこそ、その御腕に委ねて生きること、木が自然に生い茂るように、私たちにも実りがもたらされます。

今日の福音で見落としてはならないのは、私たちは種を受けると同時に、蒔くことも委ねられている、ということです。「私の口から出る私の言葉も空しく私のもとに戻ることはない。必ず、私の望むことをなし、私が託したことを成し遂げる。」（イザヤ書 55:11）この力強い神の言葉を、私たちも覚えていたいと思います。主イエスがこの約束を信じて種を蒔き続けられたように、私たちもまた、神が必ず実りを与えてくださることを信じ、希望をもって種を蒔くために出かけてまいりましょう。